

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話(三五四二)五四七一番

清元協会

世田谷区桜ヶ丘四ノ九ノ十八
電話(三七〇六)九五二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話(三五七二)〇二一六番

新内協会

新宿区大久保二の二三の二
電話(三三〇〇)四六五三番

常磐津協会

港区南青山五ノ一ノ二ノ三
FIK南青山ビル
電話 〇三三四〇七四七五三

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(三五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(三五八五)九九一六番
(五十音順)

後援 東京都

平成五年三月五日(金) 東京芸術劇場中ホール

第一部 正午開演 三時半終演
第二部 午後四時開演 七時半終演

'93 都民芸術フェスティバル

第二十三回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'93都民芸術フェスティバル公演計画一覧

分野	種目	演目	期日・会場	入場無料	問い合わせ先
音	オペラ	原 嘉壽子作曲「祝い歌が流れる夜に」 (日本オペラ協会)	2/26・2/27(2公演)・2/28 東京芸術劇場中ホール	10,000~2,000円	(財)日本オペラ振興会 3225-9633
		ヴェルディ作曲「シモン・ボッカネグラ」 (原語上演字幕付)(二期会)	3/2~4 東京文化会館大ホール	12,000~1,500円	(財)二期会オペラ振興会 3796-4711
		ヴェルディ作曲「アイダ」 (原語上演字幕付)(藤原歌劇団)	3/16・3/19・3/22・3/25 東京文化会館大ホール	20,000~2,000円	(財)日本オペラ振興会 3224-9633
室内楽	第24回 都民のための コンサート	オーケストラ	1/21~3/17 東京芸術劇場大ホール他	3,500~1,000円	(社)日本演奏連盟 3437-6837
		室内楽	1/30・3/20 東京文化会館小ホール	3,000円	
楽	ジャズ	シャンソンハイライト'93	3/5 よみうりホール	2,500円	(社)日本音楽家協会 3585-3903
		スタンダードをあなたに~ジャズ編~	3/12 よみうりホール		
	邦楽	第23回邦楽演奏会	3/5(2公演) 東京芸術劇場中ホール	1,500円	日本三曲協会 3585-9916
演劇	新劇	別役 実取入り絵巻紙「はるなつあきふゆ」(かきおろし作品) 合同公演)	3/10~21 俳優座劇場	4,500円	(社)日本劇団協議会 3341-8151 木山事務所 3443-0886
	児童劇	ふじた あさや 「歌え愛の子たちよ」	1/13~23 豊島公会堂他 4会場	定時制高校生貸切	劇団青芸 3981-5402
舞	バレエ	「白鳥の湖」全4幕	2/18~20 東京文化会館大ホール	10,000~2,000円 無料招待あり	(社)日本バレエ協会 3462-5524
		東京バレエ団 「白鳥の湖」全幕	1/16~18 東京文化会館大ホール	12,000~2,000円	(財)日本舞台芸術振興会 3725-8000
		牧阿佐美バレエ団「ジゼル」全幕	3/12~14 ゆうほうと	8,000~2,000円 無料招待あり	牧阿佐美バレエ団 3360-8251
踊	現代舞踊	「新文化人類」 「未来都市」 「道行模様—真方序の段の景」	2/6・7 東京文化会館大ホール	4,000~2,000円 無料招待あり	(社)現代舞踊協会 3400-4544
	日本舞踊	第36回 日本舞踊協会公演	2/16~18 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(社)日本舞踊協会 3533-6455
古典芸能	能	都民能	1/16 国立能楽堂	3,000円	(社)能楽協会 3574-6441
		式能	2/21 国立能楽堂	6,000円	
	民俗芸能	第24回 東京都民俗芸能大会	3/6・7 東京芸術劇場中ホール	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会 3576-8630
	寄席	第23回 都民寄席	2/12~3/4 東村山市中央公民館他7会場	無料招待	都民寄席実行委員会 3365-0874

○これからの個々の公演の詳細に関するお問い合わせは、各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問い合わせは、東京都教育庁生涯学習部文化課(電話 ダイヤルイン 5320-6861・内線54-450)へお願いします。

'93 都民芸術フェスティバルに寄せて

東京都知事 鈴木俊一



今年もまた、都民芸術フェスティバルのシーズンがやってまいりました。このフェスティバルは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へをキャッチフレーズとして、東京都が芸術文化団体の公演を助成することにより、都民の皆様により優れた舞台芸術を鑑賞していただくことを目的に始めた催しで、今年で第25回目を迎えることとなりました。

芸術性の高い公演内容で、最高の舞台芸術を提供しようという出演者の方々の並々ならぬ意欲と都民の皆様の熱い声援に支えられ、東京の初春を飾るにふさわしい多彩な文化的行事として定着しておりますことは、誠に喜ばしい限りです。

今日、心の豊かさゆとりある生活を求め、都民の芸術・文化に対する意欲と関心が高まるなかで、私は、芸術文化の振興を都政の重要な課題の一つと位置づけ、文化環境の整備に全力を注いでおります。この3月末には、両国に江戸東京博物館がオープンします。また、平成7年度の開館を目指して、江東区にある都立木場公園内に、新美術館の建設を進めております。私は、このフェスティバルを世界都市東京にふさわしい芸術の祭典として、今後とも一層充実発展させてまいりたいと考えております。

優れた舞台芸術を、一人でも多くの都民の皆様にご覧いただくことを願うとともに、フェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださっている邦楽連合会のみなさんのご活躍を心から期待いたします。

第一部 番組 (十二時開演)

一、三曲 根岸の四季

三	三絃	水田素清	増田清泉	松崎榮琴	坂本和惠	和田榮志	高橋榮清
---	----	------	------	------	------	------	------

二、宮園節 鳥辺山

同	浄瑠璃	宮園千愛子	同	三味線	宮園千愛
---	-----	-------	---	-----	------

三、義太夫壺坂観音靈驗記 — 沢市内の段 —

浄瑠璃	竹本朝重
三味線	鶴澤重輝

四、新内節 明鳥后真夢 (真夢)

浄瑠璃	富士松	佐賀吉	三味線	富士松	菊三郎
上調子	富士松	佐賀史			

五、清元おどけ俄煮珠取(玉屋)

浄瑠璃	清元	延くに寿	三味線	清元	延柳
同	清元	延くに加	同	清元	延ひろ寿
同	清元	延ひで寿	同	清元	延柳暉
同	清元	延月寿			

六、常磐津戎詣恋釣針(釣女)

浄瑠璃	常磐津	須磨大夫	三味線	常磐津	文字兵衛
同	常磐津	和佐大夫	同	常磐津	八百八
同	常磐津	一佑大夫	上調子	常磐津	紫弘
同	常磐津	和香大夫			

七、長唄石外記節

橋

唄	杵屋	喜三郎	三味線	杵屋	勘五郎
同	杵屋	六美朗	同	杵屋	廣吉
同	杵屋	吉之丞	同	杵屋	六洋助
同	杵屋	六七郎	上調子	杵屋	六九郎

雛子

笛	中川	善雄
小鼓	堅田	宏
小鼓	堅田	喜三久
大鼓	堅田	喜四郎
太鼓	藤舎	清晃

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、河東節泰 平住吉踊

浄瑠璃	山彦節子	三味線	山彦貞子
同	山彦ちか子	同	山彦さち子
同	山彦貴子	上調子	山彦千子
同	山彦音枝子		

二、義太夫壺坂靈驗記——壺坂寺の段——

浄瑠璃	竹本駒之助
三味線	鶴澤重輝

三、地唄吾妻獅子

三絃替手	藤井泰和	三絃本手	藤井久仁江
林喜美	山本友子	山本悦子	
朝岡晁世	田村悦子	田村悦子	
渡辺明子	藤岡政子	藤岡政子	
	藤井佳代子	藤井佳代子	
	藤井昭子	藤井昭子	

四、新内節関取千両幟——稻川内の段——

浄瑠璃	新内勝英太夫	三味線	新内勝史郎
		上調子	岡本宮之助

五、清元筐花乎向橘（吉原雀）

淨瑠璃	清元	榮志太夫	三味線	清元	美治郎
同	清元	幸寿太夫	同	清元	美太郎
同	清元	志寿雄太夫	同	清元	勝三郎
同	清元	清榮太夫			

六、常磐津恩愛贖関守（宗清）

淨瑠璃	常磐津	勘寿太夫	三味線	常磐津	菊助
同	常磐津	明石太夫	同	常磐津	菊志郎
同	常磐津	松重太夫	上調子	常磐津	啓寿郎
同	常磐津	淡路太夫			

七、長唄楠

公

同	同	同	同	唄
杵屋	松島	今藤	和歌山	杵屋
巴津也	英三朗	六史	富太郎	巴紗鳳
同	同	同	同	三味線
岡安	和歌山	松永	杵屋	杵屋
喜久勝	富之	忠七朗	巴吉	巴太郎

雛子

太鼓	大鼓	小鼓	小鼓	小鼓	笛
望月	望月	望月	望月	望月	望月
太左藏	左喜三郎	長左久	左之助	展司	太喜三久

曲目解説(演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、三曲 根岸の四季

山長谷檢校作曲。作詞も山長谷檢校であろうといわれる。根岸あたりの四季をうたったもので、各季節の間に合の手が入り、季節ごとに調子に変化する。とくに秋の部分は小督ことくの故事の連想から「楽の手」が入り、「いとどあわれに聞こゆなり」のあとの合の手は技巧的で、虫の鳴き声をあらわしている。

作曲年代は未詳だが、たぶん天保の初年(一八三〇年ごろ)ではないだろうか。根岸は「江戸名所図会」に「呉竹の根岸の里は上野の山蔭にして幽趣あるが故にや都下の遊人多くはここに隠棲す」とある。またうぐいすの名所として根岸の初音の里も知られていた。



二、宮籬節 鳥 辺 山

宮籬鸞鳳軒作詞・作曲。明和六年(一七六九)刊の「宮籬花扇子」にはじめて見える。もと鳥辺山における心中は、おまん源五兵衛、あるいはお染半九郎として知られており、地歌にはお染半九郎も残った。明和三年に近松半二が「太平記忠臣講釈」を書いたとき、その五段目に、塩谷判官の弟縫之助と傾城浮橋が鳥辺山心中をして遊ぶ場面を「道行人目の重縫」の外題で上演した。その道行の場面だけを独立させて曲をつけたもの。永井荷風が「夢のなかで浮世絵美人に逢うような心地がある」といった宮籬節の代表曲で、終りが二上りというのも特色。なお「思いきらしやれ」以下は、長唄「三勝道行」にそのまま利用されている。

三、義太夫 壺坂観音靈驗記 — 沢市内の段 —

明治十二年十月、大阪大江橋座で六世豊竹島太夫により初演された。これは明治初年に書かれた作者不明の浄瑠璃「観音靈場記」(一説に福地桜痴または伊東椿増作)の一部「壺坂寺沢の市住家の段」を、二世豊沢団平の妻千賀が改作し、団平が作曲したもの。ただし現在の曲は、その後さらに団平が改作し作曲し直し、明治二十年に稲荷彦六座で上演されたもの。翌年には歌舞伎でも上演された人気曲である。

座頭の沢市は洗濯や賃仕事で生活を助ける妻のお里と、壺坂寺のほとり土佐町で暮らしている。瘡で盲目になったひがみから、三年の間、毎晩七つ過ぎに家にいたことがないお里の行方を疑い続けていた。ところがお里は、夫の目を直したい一心で、壺坂の観世音に三年越しの祈願をしていたのだ。それを知った沢市は、自分も一緒に参籠しようと、夫婦そろって出かけるまで。

四、新内節 明 烏 后 真 夢 (真 夢)

鶴賀若狭掾が作詞・作曲した「明烏夢泡雪」は、新内節の名作として、今でも愛好されている。春日屋時次郎は山名屋の浦里と馴染みを重ね、借金で首がまわらなくなり、心中しようと浦里の部屋へ忍んでくる。それを遣手に見つかり、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は若い衆に表へたき出される。雪の降る山名屋の中庭で、浦里と禿かぶのみどりのみどりが古木に縛られ、折檻される。やがて屋根伝いに時次郎があらわれ、二人を助けるという物語。

それを題材にした為永春水の人情本「明烏後の正夢」の題名を借りて、富士松魯中が安政四年（一八五七）に作詞・作曲したもの。およそ上・中・下に分けられる。上は廓を抜けた浦里時次郎が、深川猿江大島の森へたどり着くまでの道行。中は慈眼寺へ着いた二人が心中しようとするところ。下は二人が心中して一時は気絶するが、名剣の威徳で生き返り、めでたく夫婦になるというもの。今日は時間の都合で上と中を一部省略して演奏する。

五、清 元 おどけ俄煮珠取 (玉 屋)

天保三年（一八三二）七月江戸中村座で、二世中村芝翫（のち四世中村歌右衛門）が演じた四変化舞踊「おどけ俄煮珠取」の一つ。二世瀬川如臯作詞。

江戸時代、夏になると町中に玉屋（シャボン玉売り）が出た。京阪では「吹き玉や、さぼん、吹けば五色の玉が出る」という売り声をかけ、江戸では「玉屋、玉屋」という売り声だったという。子供相手ではあるが、夏の風物詩としてよく知られていた。それを舞踊化したもの。とくに「玉尽し」やわらべ歌などが楽しく、清元らしい軽妙な味が十分に発揮されている。

六、常磐津 戒 詣 恋 釣 針 (釣 女)

狂言の「釣針」を脚色したもの。初世花柳寿輔の発案を河竹黙阿弥が作詞、六世岸沢古式部が作曲して、明治十六年十二月花柳のおさらい会で初演。その後平山晋吉が加筆して「戒詣恋釣針」と題を改め、明治三十四年七月、東京座で常磐津・岸沢和解の披露曲として上演された。

西の宮の夷ひらに鯛と釣竿はつきものだが、その釣針で大名と太郎冠者がそれぞれ美しい妻と醜女を釣り上げるといふ筋。着想が奇抜で笑いを呼ぶ。古い狂言の台本では、大名が醜女を釣り上げることになっていたが、江戸中頃に現在のようになったという。なお義太夫節でも、同じものを初世鶴沢道八が作曲している。

七、長 唄 石 橋

外記節

元禄年間（一六八八―一七〇四）に薩摩外記が「外記節石橋」を作曲していたが、廃曲になっていた。その正本だけが残っていたのに四世杵屋三郎助（一〇世六左衛門）が新たに作曲したもの。文政三年（一八二〇）作曲とされているが、天保元年（一八三〇）作曲とする正本もある。

謡曲の文句をほとんどそのまま長唄にしたもので、まず名乗りがあり、道行から杵人との問答があって石橋の説明、やがて獅子があらわれて狂いになる。勇壮で豪快な曲だが、変化もあり、名作といわれている。ほかと区別するために「大石橋」ともいわれる。

第二部

一、河東節 泰平住吉踊

「傀儡師」と同じく、外記節からの預り浄瑠璃とされ、河東節では文化四年（一八〇七）に演奏された記録がある。大坂の住吉神社の祭礼を主題にしたもので、その中に狂言歌謡や謡曲「翁」などが挿入されている。外記節というものの、もとの外記節に足した河東節の部分に特色がある。

「傘をさすならば」のところ、三味線弾きが「エイエイエイ」と囃子詞を唄ったり、また三味線で鈴と箏の音をきかせるなど、変化があつて楽しい。

二、義太夫 壺坂観音靈驗記—壺坂寺の段—

第一部の解説を参照されたい。さてこの壺坂の観世音は、その昔、桓武天皇が眼病平癒のために祈願して靈験のあつた寺である。二人はここまで来たが、沢市はこれから三日間断食するからといって、お里を家へ帰す。そして、どうしても直らぬ眼病と思ひ、これ以上お里に迷惑をかけたくないと、谷底へ身を投げて死んでしまふ。胸騒ぎを感じて山へ帰ってきたお里は、谷底の死骸を見つけ、あの世でも手を引いてあげようと、同じく身を投げるまで。

今日は演奏されないが、このあと、観音様があらわれて、夫婦愛を愛でて二人の命を助け、沢市の目も見えるようにするというまでである。

三、地歌 吾妻獅子

「東獅子」とも書く。大坂長堀の平又こと丁々作詞、峰崎勾当作曲。本調子手事物。寛政八年（一八〇二）成立か。

在原業平の東下りを導入部とし、業平気取りの男が江戸へ下り、吉原で遊女と馴染み、後朝きんぎょの別れを惜しみ、扇をかざして獅子舞を舞うという内容。そこで獅子の狂いに恋の狂乱の気分を重ねて、華やかな手事が展開する。獅子としては異色の曲である。三下りの替手は石川勾当が作曲したもの。

四、新内節 関取千両 幟—稲川内の段—

この作品のものは義太夫節で、明和四年（一七六七）八月、大坂竹本座で初演された。当時大坂で人気の高かった稲川、千田川の両力士をモデルにし、さらに「双蝶々曲輪日記」を下敷きにして、力士の立て引きを描いたもの。

その二段目から「稲川内」と「相撲場」を新内に脚色したものが、初世鶴賀若狭掾作曲とも二代目家元鶴吉作曲ともいう。今日は時間の都合で、「稲川内の段」を演奏する。

二百両の金の工面に稲川は悩んでいる。今日の鉄ヶ嶽との取り組みに、わざと負けてやればいいのだが、そうはいかない。そんな大事なことを話してくれないので、女房は不満である。女房は髪を梳きながら「相撲取りを夫に持てば」というクドキになる。これは義太夫節に逆輸入された。

五、清元 筐花乎向橘（吉原雀）

三升屋二三治作詞、初世清元斎兵衛作曲。文政七年（一八二四）二月、江戸市村座初演。長唄の「吉原雀」（明和五年—一七六八—初演）の歌詞を少し政め、前後に新しく足したもので「新吉原雀」ともいう。江戸吉原をひやかす遊客のようすを描いたもので、一中節「傾城浅間嶽」から「鳥尽し」を入れたのが長唄とは違う特色。その「鳥尽し」はチョボクレになっている。

もとの長唄曲もそうだったが、江戸吉原のことが今ではよくわからないところがある。全体に遊客が舟に乗って乗り込み、ひやかして歩き、馴染みの店へ揚がり、遊女とのやりとりがあつて、遊女を

鳥にたとえ、この雀は雛から廓で育ったのだから嘘をつくのが上手だといって終るといふ筋。むしろこの曲から当時の賑やかさを推定するほかにない。しかし派手で軽快で粋な曲である。

六、清元 恩 愛 贖 関 守 (宗 清)

奈河本輔作詞、五世岸沢式佐作曲。文政十一年(一八二八)十一月、江戸市村座初演。近松門左衛門の「源氏烏帽子折」の二段目「宗清館の場」からヒントをえた作品。

源義朝の没後、その愛妾常盤御前が三人の子を連れ、所々を放浪し、雪の中山城の国木幡の関に来かかる。そこで関所を固める宗清に見とがめられ、子供を助けたいならば、操を捨てて清盛に従えと言いふくめられるという場面。宗清の胸中がしつかりと言い尽くされている。しかしこれは牛若丸の見た夢という趣向であった。

七、長 唄 楠 公

榎本虎彦作詞、十三世杵屋六左衛門作曲。明治三十五年三月開曲。楠木正成(楠公)の故事を長唄化したもの。初めはもう少し長く、正成兄弟の最期までであったそうだが、渋沢男爵の注意があつて現在のようなものになったという。

楠木正成は河内の豪族で、南北朝時代、後醍醐天皇の勅を奉じて兵を挙げ、金剛山および赤坂に築城、少ない兵で鎌倉幕府の大軍を破った。しかし、のち足利尊氏が京都に入るのを防いで、湊川で弟正季とともに戦死した。その長男正行は、父の遺訓を守り、足利を倒すのを目的として高師直と四条畷で戦つて敗れ、やはり弟正時とともに戦死した。正行を小楠公という。

曲は上下にわかれ、上は桜井の駅での親子の別れの愁嘆、下は湊川の合戦で三味線が活躍する。なおこの曲は、出来たころ、長唄らしくないという評判だったが、物語としては筋も通っており、よく知られた話なので、流行している。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さりまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしよう、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年は三月十二日(土)新宿朝日生命ホールでの演奏会を予定しております。番組がきましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございました。